

科学研究費補助金研究成果報告書

平成23年 6月17日現在

機関番号：33104

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2010

課題番号：21730648

研究課題名（和文） J. デューイ教育学構想における学校間の連携による理論と実践の関係
と教職専門職教育研究課題名（英文） The Partnership Between Schools: The Relation of Theory and Practice
in the Education of Teaching Profession as Suggested in Dewey's Design of Education

研究代表者

伊藤 敦美（ITO ATSUMI）

敬和学園大学・人文学部・准教授

研究者番号：80387315

研究成果の概要（和文）：デューイ実験学校とシカゴ大学教育学科との連携による教職教育について調査検討した。その結果、学生アシスタントの導入、実験学校の教員による大学での授業、シカゴ大学の教員による実験学校への支援等の学校間の連携の実態が明らかになった。そして、今日の大学の教職課程及び教職大学院においても、学校間の連携を基盤とした理論と実践の統合、そして、理論と結びついた技術を持った専門職としての教師養成を行うことの重要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to investigate the partnership between Dewey's Laboratory School and the Department of Pedagogy at the University of Chicago. The results of this investigation focus on the use of Student Teaching Assistants, the courses taught by faculty members of the Laboratory School, and the support provided by the faculty at the University of Chicago. Today, in the Teacher Training Course, as well as in the Graduate School of Education, the relation between the schools continues to provide a foundation for integrating theory and practice. Also, this study suggests the combination of theory with teaching techniques is very valuable for those in the teaching profession.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総 計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育学、学校教育、教職専門職教育、デューイ教育学構想

1. 研究開始当初の背景

（1）近年、我国の教員養成においては、実践的指導力を養うために、学生たちが大学における理論と学校教育場面における実践と

を統合することができる教育環境づくりが課題となっている。デューイ実験学校とシカゴ大学教育学科においては、理論と実践とを積極的に関連付ける教育実践が行われてい

たことから、本研究においては、この両校の連携による理論と実践の関係と教職専門職について検討を行うこととした。

(2) 理論と実践の二元的対立こそ教職の主要な悪弊の一つであると考えていたデューイの理論と実践の二元論克服の試みの一つが、この両校の連携による教育実践であったと考えられる。平成 20 年度から我国に設置された教職大学院において、理論と実践との融合を意識した新しい教育方法の積極的な開発・導入が視野に入れていることから、教職教育における理論と実践の関係を明確化し、両者の統合を図る教育実践モデルを作成することは必須の研究課題であるといえる。

2. 研究の目的

19 世紀末に設立されたジョン・デューイ実験学校とシカゴ大学との連携による教職教育について検討し、デューイ教育学構想における理論と実践の関係と教職専門職教育について明らかにすることによって、こんにちの大学の教職課程及び教職大学院における理論と実践の関係と教職専門職教育の在り方についての知見を得るために、次の(1)～(5)の目的で研究を実施した。

(1) デューイ実験学校とシカゴ大学教育学科の連携による教職教育について、両校における教育実践の事例を取り上げて、理論と実践の関係と教職専門職教育の観点から調査分析すること。

(2) デューイ実験学校との連携によって実現していたシカゴ大学教育学科(1895～1902 年度)の教職教育における教育方法、授業形態、指導体制、カリキュラム及び連携を受け入れていたデューイ実験学校の学校経営について明らかにすること。

(3) シカゴ大学教育学部(1901～1903 年度)のカリキュラムについて調査分析を行い、教育学科と教育学部の併合の前後におけるデューイの教育学構想及び教職専門職教育論について調査すること。

(4) 19 世紀末から 20 世紀初頭のアメリカの大学における教職の位置づけや教職教育のカリキュラムについて検討を行うこと。

(5) (1)～(4)の研究成果を基にして、こんにちの大学の教職課程及び教職大学院における理論と実践の関係と教職専門職教育の在り方や展開の可能性を明らかにすること。

3. 研究の方法

(1) 『シカゴ大学年次記録』及び「インストラクターズ・リポート」等を収集し、デューイ実験学校とシカゴ大学教育学科の連携による教職教育について、両校における教育実践の事例を取り上げて、理論と実践の関係

と教職専門職教育の観点から検討する。

(2) デューイ実験学校との連携によって実現していたシカゴ大学教育学科(1895～1902 年度)の教職教育における教育方法、授業形態、指導体制、カリキュラム及び連携を受け入れていたデューイ実験学校の学校経営について『シカゴ大学年次記録』を用いて検討する。

(3) シカゴ大学教育学部(1901～1903 年度)のカリキュラムについて調査分析を行い、教育学科と教育学部の併合の前後におけるデューイの教育学構想及び教職専門職教育論について検討する。

(4) 19 世紀末から 20 世紀初頭のアメリカの大学における教職の位置づけや教職教育のカリキュラムについて検討を行う。

(5) (1)～(4)の研究から得られた知見を基にして、こんにちの大学の教職課程及び教職大学院における理論と実践の関係と教職専門職教育のあり方を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

① デューイ実験学校とシカゴ大学教育学科の連携による教職教育

デューイは、「大学の学問としての教育学」(1896)において、教育の科学・技術を指導することに関しては明確な分業が必要である」と述べ、(i)一般教員の養成を主要な課題とする学校と、(ii)国の教育組織を支える指導者たちの教育をする学校という二つの学校の必要性を説いている。(i)の学校の職分は、新しい方針に沿って実験を試みるということよりも、すでによく確立している方針に沿って、訓練を施すことでなければならないし、(ii)の学校は、教育学上の発見や実験という教育活動にもっと直接専念すべきであると論述している。そして、(ii)の教育活動は、大学・大学院課程として行わなければならないと述べる。なぜなら、大学は教育の組織化の自然な中核であり、極めて多様な現在の実践の中に現れる最善のものを集めて焦点を当て、科学的に吟味し、具体的な使用に合わせた形にして、政府の強制ではなく、科学的証明という認可のもとに公教育制度に発展していく役割を担っているからであるとデューイは論じている。

デューイの分業の構想通り、開設当初のシカゴ大学教育学部(School of Education)と教育学科(Department of Pedagogy)との関係は、教員養成と教育学研究・教育とを別けて行うものであった。すなわち、初等教員養成を行う教育学部をパーカーが、中等以上の教員養成と現職教員向けの専門教育、すなわち、教育専門職教育を行う教育学科をデューイが担当していた。

デューイが学科長を務めるシカゴ大学教

育学科においては、実験室的な役割を持つ実験学校との連携によって、国の教育組織を支える指導者たちの教育をする役割、及び、教育学上の発見や実験という教育活動を行っていた。この両校は、シカゴ大学学生の実験学校でのアシスタント、実験学校の教員による大学での授業、シカゴ大学の教員による実験学校への支援といった形で連携を図り、教育実践を行っていた。

シカゴ大学教育学科の学生たちにとって実験学校でアシスタント活動を行うことは、講義や教科書で示されたものの真意を理解する、学んだ諸原理を吟味したり論証したりする実践を行う、実験学校での実践を大学で理論化する、実験学校の教育実践の補助となるという意義があった。このアシスタント制度の導入は、シカゴ大学の学生にとっては大学での学問研究を現実の学校教育場面での活動を伴って理解する機会となることに加えて、奨学金を得る機会にもなっていた。デューイ実験学校にとっても、大学生がアシスタント活動を行うことによって一人ひとりの子どもたちの教育を充実させる、最新の研究の成果を学校に取り入れることができる、財政難による教員不足を補うという利点があった。

また、デューイ実験学校の教員による大学での授業は、バランスのとれたカリキュラムを作成するための科学研究、実験学校の教員たちが自らの実験学校における実践を理論化して研究成果を学生に伝える、教材と方法との間の密接な関係に着目した授業を行うという意義があった。学生たちは、実験学校の大学助言者や教員から実験学校における教育実践から得られた成果を学び、教育経験や授業経験に応じてアシスタント活動を行うことで、学んだ成果を検証し吟味する機会を持ち、大学における新たな理論化につなげていた。他方で、実験学校教員たちにとっては、学生に研究成果を伝えるために、自らの実験学校における実践を理論化する機会にもなっていた。

そして、シカゴ大学の教員による実験学校への支援は、学問研究の成果を実験学校の教育実践に生かすことに加えて、両校間の関係を密接なものにする役割を担っていた。

こうした両校の連携によって、大学における教育学研究・教育を基盤とした理論と実践を往還する教職専門職教育が可能となっていた。

②シカゴ大学教育学科（1895～1902年度）の教職教育における教育方法、授業形態、指導体制、カリキュラム及び連携を受け入れていたデューイ実験学校の学校経営

1896年度版『シカゴ大学年次記録』に記されているシカゴ大学教育学科の構想によれ

ば、教育学科の主目的は「教育上の諸問題を広範かつ科学的に取り扱う有能なスペシャリストを養成すること」であるという。この目的を実現するために、哲学科の「心理学」「倫理学」「論理学」を受講した上で、「心理学及びそれに関連する科目群」、「教育理論の科目群」、「さまざまな専門分野の教授法の科目群」の3分野について学習を進めること、教材と方法の間の密接な関係に着目すること、バランスのとれたカリキュラムを作成することについて科学的に研究を進める機会を実験学校が提供すること、教育諸原理の実際的な応用に関する特別研究や、学校現場の観察、実験学校での科学的な観察と調査の機会が持たれることが求められた。

そして、1899年度版『シカゴ大学年次記録』の教育学科についての説明には、大学の授業科目と実験学校での実践との関連性を示す次のような記述がある。「特に、2、3、25の授業科目と関連して、これらの授業科目では、通常の見学と授業観察ばかりではなく、行われている授業の様々な面における原則と運営・管理について学校のスタッフとともに話し合う機会があるだろう。個々の受講生は、科学、歴史などの特別なトピックを採り上げる機会もまたあるだろう、教えることを目的にして資料を調べて組み立てる、そして許可された場合には指導者の下で授業をすることもある。」

引用文中で取り挙げられている授業科目2は、「ティーチングの理論と実践」(Theory and Practice of Teaching)、授業科目3は「教育原理」(Principle of Education)であり、いずれも准教授のバルクリー (Julia E. Bulkley, Ph.D., Associate Professor of Pedagogy) が担当予定である。授業科目25は「学校システムの組織と運営」(Organization and Administration of School Systems) でローク講師 (George H. Locke, A. B., Instructor in Pedagogy) が担当予定である。これらの3つの授業科目を担当予定である2人は、シカゴ大学のスタッフであり、同科目は実験学校の教員が担当する授業科目ではなかった。しかしながら、ローク講師の授業科目では「学校のスタッフとともに話し合う」ことや、「許可された場合には指導者の下で授業する」という、実験学校での学習が取り入れられていた。また、バルクリー准教授の「ティーチングの理論と実践」では学校での実践が課題として課せられていたし、「学校システムの組織と運営」においても典型的な小学校を見学することになっていた。さらに、「ティーチングの理論と実践」は、授業の経験に基づいて授業クラスが分けられ、授業経験者は理論の学習に重点を置き、実践的なワークは少なく設定されていた。学生はこうした授業科目を履修して、

実験学校において同校の教員たちと授業の原則や管理・運営について話し合ったり、授業を行って指導を受けることになっていた。デューイは、教育学科について「理論的な研究の諸成果を実際の活動の状態で吟味し公開できる学校」の必要性を説いており、カリキュラム上にもこの構想が反映されていた。

1900 年度版『シカゴ大学年次記録』においても引き続き大学の授業科目と実験学校における実践との関連性について書かれているが、関連する科目が「6、7、8、9、10、15、16、22、25」に変更になっている。6 から 10 はいずれも実験学校の教員が担当する授業科目であった。これらの授業科目に、大学助言者のヤングによる 15・16「教育の倫理学」(Ethics of Education)、デューイによる 25「教育の心理学的基礎」(Psychological Basis Education) とが加えられている。実験学校の教員による授業科目とシカゴ大学教育学科の関連性を示す記述内容の変更から、前年度よりもさらに実験学校との関連性が意識されていることは明らかである。

デューイ実験学校教員の授業科目は 1898 年度版の年次記録より導入された。教育学科の開講科目は夏学期に多い傾向であるが、実験学校教員の担当科目は秋学期以降である。デューイは、年次記録の教育学科の構想において、純粋に抽象的な教育学では教材と方法の間の密接な関係が無視されていることから、他学科においてそれぞれの専門科学の方法に特に強調をおいた科目を受講するようにすることで、進んだ研究の最良の方法に即して授業を行うことを示していた。そのため、受講生たちが、最新の科学の研究動向を学んだ後に学校教育の具体的なカリキュラムについての科学研究を行うために秋学期以降に実験学校教員の授業科目が設けられていたと考えられる。

こうした連携はデューイ実験学校にとっては、大学における最新の研究成果がもたらされること、バランスのとれたカリキュラムの作成や子どもの生活の必要と適合する教材選択を図るという意味での正しい方法を開発すること、実験学校の教員たちの学習機会となること、財政難による教員不足を補うことにつながっていた。

③シカゴ大学教育学部(1901~1903 年度)のカリキュラム、及び、教育学科と教育学部の併合の前後におけるデューイの教育学構想及び教職専門職教育論

1902 年にパーカーが急逝し、デューイが教育学部長に就任したことによって、シカゴ大学に併存していた二つの教育学部門は、その大部分が教育学部に併合された。

デューイ学部長時代とパーカー学部長時代の教育学関連科目のカリキュラムを比較

検討した結果、デューイ学部長時代には、教育学関連科目の充実及び入学要件の引き上げと学位の授与による高度な専門教育が実現されていたことが明らかになった。

教育学関連科目の充実については、デューイが学部長となって 2 年後の 1903 年度に教育社会学、教育心理学、教育史、一般教育学に関する授業科目を設けるというデューイの教育学構想を活かした授業科目が増設され、必要とされる理論を十分に学ぶ環境が整備された。担当教員や授業形態についても大幅な改革が実施された。1901 年度はパーカー一人でほぼすべての教育学関連の授業科目を担当する計画であったが、1902 年度、1903 年度は哲学科(旧教育学科)の教員、旧シカゴ学院の教員、ハーバー学長、人文学部長のジャドソンの担当授業科目や、複数の教員で行う授業科目が設けられ、多様な学びが可能となった。

入学要件の引き上げと学位の授与による高度な教師教育の実現については、デューイは、ジュニア・カレッジ相当ではなく、シニア・カレッジ相当の教員養成を行うことで専門職として十分な学識のある教員の養成を目指し、実践化した。1903 年度の段階でシカゴ大学教育学科は、従来教育学部が担ってきた初等教員養成、教育学科が担ってきた教育専門職養成と中等教員養成を行うことのできる組織として整備された。すなわち、研究成果①で述べた、シカゴ大学着任当初のデューイの、一般教員の養成を主要な課題とする学校と、国の教育組織を支える指導者たちの教育をする学校という分業の構想は、制度上統合された。

④19 世紀末から 20 世紀初頭のアメリカの大学における教師教育

松浦(1998)によれば、アメリカの大学史において教育学関係の恒常的な教授職が置かれたのは 1970 年代であり、20 世紀初頭にかけての数十年間に、教育学科・教育学部の設置があいつぐようになった。ただし、20 世紀に入った時点では、特に初等学校教員養成に関しては師範学校が主流であったが、人口の爆発的な増加やハイスクールの発展によって、中等学校教員の養成が焦眉の急となったことから、教育学部門を拡充しつつあった総合大学は、教育の学問的・科学研究と中等学校教員養成という専門職教育の二つの仕事を引き受けなければならなくなった。

スタイル(1960)によれば、教師教育を行っていた大学は、1870 年 9 校(公立 4 校、私立 5 校)、1890 年 25 校(公立 10 校、私立 15 校)、1910 年 110 校(公立 29 校、私立 81 校)であった。それに対して師範学校は、1870 年 69 校(公立 62 校、私立 7 校)、1890 年 210 校(公立 167 校、私立 43 校)、1910 年 258 校(公立

190校、私立68校)であった。

つまり、デューイがシカゴ大学に着任した当時のアメリカの教員養成は、主として師範学校が担っていた。こうした状況の中で、デューイは、これまで教職志望学生向けの教科にすぎなかった教育学を大学の正規の学問として確立する必要性を訴え研究大学における教育専門職教育の在り方を模索した。

⑤こんにちの大学の教職課程及び教職大学院における理論と実践の関係と教職専門職教育のあり方

デューイは「教育における理論の実践との関係」において、よい教師とは「発達の心理学、論理学、倫理学を生き生きと自由に使いこなすことのできる教師」、「魂の生活(soul-life)に靈感を与え導く教師」であると述べている。そして、よい教師にするための「学問(scholarship)」の重要性を説いている。すなわち、「学問はそれ自体でよい教師にするためのトレーニングやよい教師を生み出すための最も効果的な道具である」、「教師たちに明確な視野を持たせ、精神的活動に意識的に関連付けられるならば、学問は私たちが普通に考えているよりもずっと価値がある教育的財産になる」という。実践的なワーク(practical work)についても、教育の技術の熟達よりも「教育の思慮深い臨機応変な学徒」となることを重視すべきであるという。1896年の教育学科の構想にも心理学、論理学、倫理学を学んだ後に、他の授業科目を履修する方針が示されていた。

さらに、デューイは同論文において、心理学の例を取り上げて、学習者の経験と教室における教育の孤独について言及している。すなわち、学習者は自身の経験の中に、学習の過程において、理論的な原理や、精神の成長の法則を例証したり活気づける多くの実践的材料(practical material)や実践的経験(practical experience)を持っているに違いないが、これらを考慮に入れないと、教室における教育と学習者の経験とが孤立してしまうという。デューイは、「理論と実践は、教師御個人的経験を離れてはともに成長しないし、また、バラバラでは、教師の個人的経験の中に深まっていくこともない」とも述べている。

シカゴ大学教育学科では、既にかんりの教育に関する経験を持った学生が学んでいたことから、彼らは、彼ら自身の中にかなり多くの実践的材料や実践的経験を持っていたはずである。そのため、実践を伴う同学科の授業科目は、学生の実験経験や授業経験の有無により実験学校におけるアシスタントを実施する場合としない場合とに分けられ、授業観察の時間数も教育経験に応じて規定されていた。教育に関する経験を持っている学

生が、実験学校で行った研究の成果を出版している事例から、彼らが、シカゴ大学教育学科と実験学校において、既に持っている実践的材料・経験を理論化する研究に取り組んでいたことが示唆される。

シカゴ大学教育学科における教師教育においては、十分な学識を備えるための教育学教育及び学生の個人的経験を考慮した講義や演習と実践が行われていた。すなわち、心理学、論理学、倫理学を基盤として、他の授業科目を履修すること、実験学校において、教育経験や授業経験に応じて、授業観察や授業の補助を行い、これらの学習の成果を生かした授業を実験学校において行うことや、自らの実践的材料・経験を理論化する研究を行うこと及び行った授業や研究の成果を大学の講義や演習において吟味することを通して、理論と実践とが結びつくことを目指す教師教育が行われていた。

学生たちが、大学における理論と学校教育場面における実践とを統合することができる教育環境づくりが課題となっているこんにちの大学の教職課程及び教職大学院においても、十分な学識を身につけるための教育学教育、学校現場との密接な結び付きを基盤とした学校間の連携による理論と実践を往還する教育、そして、学習者があらかじめ持っている実践的材料・経験と理論とを結びつけることも含めた、理論と実践の統合の機会を保障することが必要である。また、大学と学校教育現場の教師間の連携も不可欠である。こうした教育環境を構築することにより、理論を知的道具として自由に活用できる能力、すなわち、理論と結びついた技術を持った専門職としての教師教育が可能となろう。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究の成果は、デューイ教育学研究、及び、我国の教師教育の2つの観点から捉えられる。

まず、デューイ教育学研究の観点からは、『シカゴ大学年次記録』、「インストラクターズ・レポート」等の第1次資料を分析対象とし、シカゴ大学教育学科及びデューイ実験学校における教育実践の具体的な事例を基に分析検討を行い学校間の連携の観点からデューイ教育学構想における理論と実践の関係の解明を目指すことは国内外で未着手の研究課題であることから、本研究で得られた知見は、ジョン・デューイ教育論の新たな側面であると位置づけられる。

次に、我国の教師教育の観点からは、理論と実践との融合を目指した新たな教師教育方法の積極的な開発・導入が意識されたのは近年のことであることから、有効な教育方法を確立するには至っていないため、教職専門

職教育における理論と実践の関係を明確化し、両者の融合を図る教育実践モデルを検討する本研究は、今後の教職専門職教育の在り方や展開の可能性を示唆するものと位置づけられる。

(3) 今後の展望

本研究では、学校間の連携による理論と実践の関係に焦点を絞って検討を行った。今後は、検討の範囲をシカゴ大学におけるデューイの教師教育カリキュラム全体に拡大し、デューイがなぜ教員養成の高度化を行ったのか、いかにして教育学研究・教育、教師養成教育、教職経験者の専門職教育の統合を成し得たのか、成し得るためのカリキュラムとはいかなるものであったのかを分析することを通して、デューイ教育学構想における教師教育論の全容を解明し、こんにちの大学における教職課程及び教職大学院における教師教育の在り方について検討することを研究課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 伊藤敦美、教師教育とデューイーデューイ実験学校におけるアシスタントの意義ー、日本デューイ学会紀要、査読無、第51号、2010年、125ー134頁。
- ② 伊藤敦美、デューイ実験学校におけるシカゴ大学学生のアシスタント活動、日本デューイ学会紀要、査読有、第50号、2009年、149ー159頁。

〔学会発表〕(計3件)

- ① 伊藤敦美、デューイ教育学構想における教職専門職教育論の検討ーシカゴ大学教育学部のカリキュラムを中心としてー、日本デューイ学会第54回研究大会、2010年9月19日。
- ② 伊藤敦美、教師教育とデューイーデューイ実験学校におけるアシスタントの意義ー、日本デューイ学会第53回研究大会シンポジウム、2009年10月3日、椋山女学園大学。
- ③ 伊藤敦美、デューイ実験学校でのアシスタント活動に焦点をあてたシカゴ大学教育学部のカリキュラム、日本カリキュラム学会第20回大会、2009年7月10日、神田外語大学。

〔図書〕(計1件)

- ① 伊藤敦美、考古堂、デューイ実験学校におけるカリキュラムと学校運営、2010年、300頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 敦美 (ITO ATSUMI)

敬和学園大学・人文学部・准教授

研究者番号：80387315